執筆者紹介

麻 国慶 Ma Guoqing

一九六三年生まれ。中央民族大学民族学与社会学学院院長・教授。社会人類学、中国地域研究。『家与中国社会構造』『永遠的家―文化慣性与社会結合』『人類学的全球意識与学術自覚』『文化人類学与非物質文化遺産』

首藤明和 Shuto Toshikazu

一九七〇年生まれ。中央大学文学部教授。社会システム理論。『中国の人治社会―もうひとつの文明として』『分岐する現代中国家族―個人と家族の再編成』(共編著)『日本と中国の家族制度研究』(共編著)『中国のムスリムからみる中国―N・ルーマンの社会システム理論から』

周 星 Zhou Xing

一九五七年生まれ。神奈川大学国際日本学部教授。中国文化人類学、民俗学。『道有屎溺―当代中国的厠所革命』『郷土生活的邏輯―人類学視野中的民俗研究』『本土常識的意味―人類学視野中的民俗研究』

稲澤 努 Inazawa Tsutomu

一九七七年生まれ。尚絅学院大学人文部門准教授。文化人類学。『消え去る差異、生み出される差異―中国水上居民のエスニシティ』「現代中国の「漁民」と宗族―広東省東部汕尾の事例から」「「食べる」茶の生むつながりとへだたり―広東省汕尾の鹹茶の事例から」

賈 玉龍 Jia Yulong

一九八八年生まれ。国立民族学博物館外来研究員。社会人類学。「人類学の親族論における宗族研究の再考」「書評：『〈宗族〉と中国社会』瀬川昌久・川口幸大編、風響社」"Authenticity' and 'Inauthenticity' in Sneaker Culture: A Case Study of Changhuo Sneaker in China"

夏 遠鳴 Xia Yuanming

一九七七年生まれ。嘉応大学客家研究院助理研究員。客家の歴史と文化。「客都的変遷―清末以降梅州地区客家意識的形成及客家文化的建構与利用」「明清広東方志中有関客家方言的記載」『全球化背景下客家文化景観的創造―環南中国海的箇案』(共編著)

河合洋尚 Kawai Hironao

一九七七年生まれ。国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授。社会人類学。『景観人類学の課題―中国広州における都市環境の表象と再生』『日本客家研究的視角与方法―百年的軌跡』『〈客家空間〉の生産―梅県における「原郷」創出の民族誌』

周 群英 Zhou Qunying

一九七七年生まれ。中国北京師範大学社会学院副教授。性別と家庭、社会変遷研究。「〝家里外人〟―家政工身份転換的人類学研究」「代際関係視角下的儀式変遷―以川村〝坐月子〟為例」「技術与性別―穏婆辺縁地位的建構」

坂部晶子 Sakabe Shoko

一九七〇年生まれ。名古屋大学人文学研究科准教授。社会学、中国地域研究。『「満洲」経験の社会学―植民地の記憶のかたち』「中国北方民族オロチョンの民族イベントにおける「伝統」意識―建旗60周年記念大会を事例に」「交錯する農村の近代―岩手県沢内村と黒龍江省方正県」

丁 紅衛 Ding Hongwei

一九六七年生まれ。北京外国語大学北京日本学研究センター副教授。日本経済。『経済発展与女性就業』「中国における家計生産関数に関する研究」「日本大気汚染治理経験対我国的借鑑」

王 麗 Wang Li

一九八八年生まれ。安陽工学院経済管理学部講師。地域経済学、日本経済。「産業構造と都市空間の変化」

賽漢卓娜 Saihanjuna
長崎大学多文化社会学研究科・多文化社会学部准教授。家族社会学、移民研究。「「ナショナルな標準家族」としての日本の国際結婚」「另一種移動―朝鮮族女性婚姻移民及其娘家的家庭策略」『国際移動時代の国際結婚―日本の農村に嫁いだ中国人女性』

横田祥子 Yokota Sachiko
一九七六年生まれ。滋賀県立大学人間文化学部准教授。社会人類学、地域研究。「政治的な正しさの背後にかくれたローカルな論理によりそう―商業的国際結婚と家族」「負債関係に働く力学―台湾中部の地方都市における国際ブローカー婚の互酬性」「インドネシア華人女性の国際結婚を通じた世帯保持―西カリマンタン州シンカワン市の事例から」

臧 政 Zang Zheng
一九八五年生まれ。中南財経政法大学哲学院講師。倫理学、社会学。『基督教与伊斯蘭教的儒家倫理共識―明末清初〝耶儒〟与〝回儒〟之比較』『福利与倫理―基本理論与実証研究』(共着)「論儒家倫理的差等与平等之統一」

施 利平 Shi Liping
一九七〇年生まれ。明治大学教授。家族社会学。『戦後日本の親族関係―核家族化と双系化の検証』「中国における都市化と世代間関係の変容」「世代間関係」

磯部美里 Isobe Misato
一九七四年生まれ。国際ファッション専門職大学国際ファッション学部准教授。地域研究(中国)、ジェンダー研究。「ジェンダーからみる「伝統医」の継承と創出―中国・西双版納タイ族を事例として」「中国・タイ族の「貰い子」慣行」「仏教儀礼を支える、変える―中国シーサンパンナのタイ族女性と上座仏教」

田村和彦 Tamura Kazuhiko
一九七四年生まれ。福岡大学人文学部教授。文化人類学、民俗学。「文化人類学與民俗学的対話―圍繞「田野工作」展開的討論」「現代中国における墓碑の普及と「孝子」たち―陝西省中部農村の事例から」「中国民俗学の現在―現地調査と民俗志を中心に」

本野英一 Motono Eiichi
一九五五年。早稲田大学政治経済学術院教授。アジア経済史。*Conflict and Cooperation in Sino-British Business, 1860-1911: The Impact of the Pro-British Commercial Network in Shanghai*『伝統中国商業秩序の崩壊―不平等条約体制と「英語を話す中国人」』ティモシー・ブルック『フェルメールの帽子―作品から読み解くグローバル化の夜明け』(翻訳)

土肥 歩 Doi Ayumu
一九八三年生まれ。同志社大学文学部文化史学科助教。中国近現代史。「ミッション史料からみる珠江デルタ支流域の地域社会」『華南中国の近代とキリスト教』「広西省における壬寅奇災とアメリカ救済遠征隊」

松岡正子 Matsuoka Masako
一九五三年生まれ。愛知大学現代中国学部教授。中国文化人類学。『青蔵高原東部のチャン族とチベット族―2008汶川地震後の再建と開発』『中国青蔵高原東部の少数民族 チャン族と四川チベット族』『四川のチャン族―汶川大地震をのりこえて〔1950-2009〕』(共著)

唐 燕霞 Tang Yanxia
一九六八年生まれ。愛知大学現代中国学部教授。産業社会学。『中国の企業統治システム』『グローバル化における中国のメディアと産業』(共編著)「蘇南新型都市化モデルについての考察―常州市の事例を中心に」

翻訳者紹介

飯田直美 Iida Naomi
愛知大学国際問題研究所補助研究員。中国文

学。「中国人の人情と面子」（共訳）

金　鑫　Jin Xin

早稲田大学商学学術院産業経営研究所助手。公共政策学、労働経済学。

学会通信

◎学会員活動（二〇二〇年十月～二〇二一年三月）

加治宏基

「東アジアのツーリズムをうごかす中国の政治力学」（『愛知大学国際問題研究所紀要』第一五七号、二〇二一年三月）、研究会主催　日中平和学オンライン交流会「ポスト・コロナ時代における東アジア平和学の展望」（日本平和学会国際交流委員会、二〇二〇年一二月五日）

金　湛

学会報告「生産関係の角度からみた中国の土地政策―「三権分置」政策に対する考察」（日本現代中国学会第七〇回全国学術大会、二〇二〇年一一月一日）、「所有、組織、規模―〝三権分置〟政策に対する考察」（『ＩＣＣＳ現代中国学ジャーナル』第一三巻第二号、二〇二一年一月）

砂山幸雄

書評「中村元哉編『憲政から見た現代中国』東京大学出版会、二〇一八年」（『中国研究月報』二〇二〇年一一月号）、書評「飯島渉『「中国史」が亡びるとき―地域史から医療史へ』研文出版、二〇二〇年」（『週刊読書人』二〇二一年一月二九日）

唐　燕霞

「中国都市部における社区在宅養老サービスの現状と課題―北京市を事例として」（『中国21』Vol・54、二〇二一年三月）、研究会発表「中国のコーポレート・ガバナンスに関する研究」（二〇二一年三月、オンライン研究会）

松岡弘記

「中国上海での中国人野球と日本人野球の誕生から発展にみるその違いと日中戦争勃発がその両者の野球へ及ぼした影響―上海セント・ジョーンズ書院と東亜同文書院の野球部の比較からみて」（共著、『愛知大学体育学論叢』第二八号、二〇二一年三月）

松岡正子

「超高齢社会における高齢者と家族の選択―台湾金門県珠山村を事例として」（『愛知大学国際問題研究所紀要』第一五六号、二〇二〇年一〇月）、「チャン族の「家族」―四川省阿壩蔵族羌族自治州茂県大瓜子寨を事例として」（『中国21』Vol・54、二〇二一年三月）

中国21 Vol・55 予告（21年9月刊行予定）

特集◉高齢化と中国経済（仮題）

新型コロナウイルスのパンデミックが続く二〇二一年、中国は第十四次五カ年計画（二〇二一～二〇二五年）をスタートさせる。同計画では「質と効率を著しく高めたうえで、経済の持続的で健全な発展」を目指し、二〇二五年までに高所得国入りを果たすとしている。

しかし、その実現は容易ではない。解決すべき難題が山積している。そのひとつが人口問題だ。中国の人口は二〇一九年に一四億人に達したが、日本同様に少子高齢化（生産年齢人口の減少）という構成変化が顕著に進行している。二〇一六年には「一人っ子政策」を廃止し、出産抑制を緩和したものの、出生率の減少が続いている。高齢化はさらに深刻だ。六〇年代の人口爆発期に生まれた世代が大挙して還暦を迎え、五年以内に六〇歳以上の高齢者が三億人に達する見通しだ。

「未富先老」という前例のない状況に対し、中国はどのような処方箋によって、高齢社会下での高所得国入りを成し遂げようとしているのか。日中の研究者・専門家がその現状と展望を論じる。

編集後記――コロナ禍のためにオンラインで実施した座談会は、お久しぶりですという挨拶で始まり、あっという間に四時間が経過した。知らなかったこと、気づかなかったことをたくさん学んだ。「家族」は私にとって常に鬼門のテーマだった。チャン族の家族関係では父母や兄弟姉妹、親族のいう「家族」の範囲が微妙に違っていて、葬式には母舅という絶対権力者まで現れるからだ。しかし二〇〇八年汶川地震後、この究極の人間関係が少しずつみえてきた。各地に散らばっていた家族が村にもどり、倒壊した家屋を前に再建するのか移住するのか、家族内や村内で話し合いが続けられた。経済力をもつ家族成員（男女を問わず）を中心に「戦略」がたてられ、大金が動いた。家族関係の強弱が可視化された「時」だった。（松岡正子）

◇特集編集の最中に、春節を迎え、中部地域の華僑華人団体はオンラインで春節祝のイベントを実施していた。日本に数十年間生活していても、毎年春節時には「春聯」や提灯、「切り絵」などで家を飾り、子供たちに中国的な「過年」の雰囲気を味あわせ、中国国内の家族や親戚とのつながりを深めるのだと、イベント参加の華僑の一人が語った。故郷への想い、家族の絆を大事にすることは世界中の華僑華人に共通するのだろう。このように、中国家族の「伝統性」は日々の生活を通して代々伝わっていくのだと思った。◇最後に、本特集の刊行にあたり、多くの方々からご協力を得た。コロナ禍で仕事や生活にご多忙のなか座談会に参加いただいた先生方、執筆者の皆様に深く感謝申し上げます。（唐 燕霞）

投稿原稿募集　新しい発想から現代中国をめぐる諸問題に切り込む、気鋭の論考を広く募集します。現代中国に関するテーマであればジャンルは問いません。むしろ、既存の学問のジャンルを打ち破るような斬新な発想を期待します。①未発表のものに限る　②論説、研究ノート、報告・ルポ、資料等=50枚程度、書評=20枚程度、エッセイ=10枚程度（400字詰原稿用紙換算）　③ワープロソフトで作成した原稿の打ち出し2部およびデジタルデータを提出。デジタルデータはeメールでの送信も可。

〈原稿送付先〉愛知大学現代中国学会　E-mail：china21@ml.aichi-u.ac.jp

投稿規程の詳細は現代中国学会までお問い合わせ下さい。採否は編集委員会の査読を経て決定し、採用にあたっては規定により薄謝を進呈します。なお、応募された原稿は採否にかかわらず返却いたしません。

中国21編集委員会

〔編集長〕松岡正子　安部 悟　阿部宏忠　金 湛　高 明潔　唐 燕霞

愛知大学現代中国学部 http://www.aichi-u.ac.jp/college/chi.html

中国21 Vol.54

特集 家族の諸相

2021年3月15日発行

ISBN 978-4-497-22106-3　C3036

編　集　愛知大学現代中国学会
名古屋市中村区平池町4-60-6　〒453-8777
Tel. 052-564-6128　Fax. 052-564-6228

発行人　砂山幸雄

発売元　株式会社 東方書店
東京都千代田区神田神保町1-3　Tel. 03-3294-1001

制作印刷　株式会社 あるむ
名古屋市中区千代田3-1-12　Tel. 052-332-0861